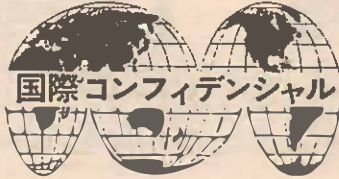


世界を駆けめぐる大ニュースの陰に隠れる
「小さくても重要な情報」。その発掘が大切



国際関係の本質的な潮流をつかむうえで、大新聞が大見出しで報ずる記事よりも、ほんの小さなベタ記事や知名度の低い新聞に出る報道が重要な

モンゴルとアフガンの友好関係



東京外国語大学教授 中島 嶺雄



な意味を持つていることがしばしばある。

ここに紹介する『蒙古消息報』は、そのような一般には知られていないが重要なミニ新聞の典型だといつてよい。

この新聞は、しかし、一九二九年の創刊という歴史の古い新聞で、毎週一回、ウランバートルでモンゴル人民共和国の国営モンツァメ通信社から発行されているタブロイド判の華字紙である。

今春以来、モンゴルでは在留中国人の集団帰国をめぐってトラブルが生じたが、この新聞は、モンゴルに約七〇〇〇人はいしは一万二〇〇〇人住んでいるといわれるそれらの「留蒙華僑」を対象にした新聞である。

しかしウランバートルのように、西側の新聞記者が常駐していない「陸の孤島」のような都市であつてみれば、このような南国通信社の新聞にも、世界に報じられない重要な

ニュースが載ることも多い。いま私の手元にある一九八三年七月二三日付の『蒙古消息報』には、モンゴルを友好訪問したアフガニスタンのカルマル議長ら党・政府代表団と、モンゴル側のツェデンバル書記長らとのあいだで挙行された七月一二日の友好集会の模様、および同一三日付のモンゴル・アフガニスタン共同声明が掲載されている。

アフガニスタンとモンゴルのあいだには、アフガニスタンで王制が打倒されたのちの一九七三年七月に「モンゴル・アフガニスタン友好協力条約」が締結されているのだが、ソ連軍のアフガニスタン軍事進駐以来はや四年目を迎えようとしている今日、一般には西側諸国の目の届かないユーラシア大陸の内部で、着々とソ連圏社会主義国同士の交流が進み、アフガニスタン問題の既成事実化が図られていることに注目しないわけにはゆかない。

大陸貫くミニ枢軸

モスクワからすればモンゴルとアフガニスタンは、ともに隣接する内陸国として戦略

上も重要であるばかりか、ともにソ連の影響下にある「遊牧社会主義国」でもあるので、つねにモスクワを中心とした二つの対称点として認識し、行動してきたのであった。ソ連のアフガニスタン進駐もこのような地政学的状況が背景にあったといえよう。

しかし、こうしてひとたび既成事実が出来上がると、今度は、その事実が新しい発展をするのであり、ウランバートル・カブールというミニ枢軸が、ユーラシア大陸を貫いていまや形成されつつある。

このような動きを、従来の中国なら、大いに警戒するところであろうが、最近では中国自身が中ソ改善へと動き出しているの、さして気にならないと見えて、中国は沈黙を守っている。そればかりか、最近では中蒙関係にも改善への動きがはじめており、過般の「留蒙華僑」をめぐるトラブルも大きな問題には発展しなかった。

(国際コンフィデンシャルは本号をもって終わります)